



日本洋書協会

JAPAN ASSOCIATION OF INTERNATIONAL PUBLICATIONS

MAY 2018
REPORT MAGAZINE

会報誌 | vol. 52 no. 3

Published by JAIP 1-1-13-4F, Kanda-Jimbocho, Chiyoda-ku, Tokyo 101-0051

e-mail:office@jaip.jp

理事会報告 2018年3月30日(金)

出席(敬称略) グレシャム、山川、仲、細谷、鶴
(総務委員長、事務局)

1. 予算状況

事務局から2月末現在の予算状況の説明があった。ほぼ問題無く推移しているとして了承された。

2. 財政問題(継続)

総務委員会見解

平野委員長から委員会での討議内容の説明があった。事務局業務の縮小に関し、2、3の案があり、具体的に詰めて行く。これに対し、理事長から協会自体の在り方を含めて討議するよう指示があった。

3. 来年度予算討議

総務委員会案が提示され、了承された。ただし財政問題解決の施策は順次行なっていく。

4. 委員会報告

・総務: 前述

・メディア・広報: 会報、ダイレクトリーの編集は共に順調に進んでいる。

2月号で一部訂正があったが、今後進め方を統一する。

・文化・厚生: 来年度の活動予定はボウリングの他、映画鑑賞会を数回、美術鑑賞会を2回、ラフティング、ボルダリングを行う予定。

・事業: 来年度もTIBFは無いので、神保町BFへの参加を検討。他の可能性も模索する。

5. 総会までの日程

- ・4月5日: 会計監査
- ・4月初旬: 決算承認
- ・4月中旬: 総会資料配付
- ・5月25日: 総会

6. 退会承認

退会届けの出されたクロニクル・ブックスとアカデミア洋書の退会を承認した。

7. その他

グレシャム氏が理事長をしているRefugees International Japan(国際難民支援会)のセミナーを行いたい。

以上

理事会 2018年4月第2週

会計監査を受け持ち回り理事会を行った。過半数の承認を受けたので、2017年度決算は理事会で承認された。

以上

2017 年洋書貿易統計

藤 村 裕 二

3月に財務省（関税局調査課）から公表されました、2017年の「貿易統計」について報告させていただきます。このレポートは、「貿易統計」の中の「普通貿易統計」のデータから、絵本を含む洋書と洋雑誌、それに楽譜や地図、カレンダーなどを含む「印刷物」に関する統計を抜き出して整理したものです。尚、関連データの参照先URLは以下の文中のものも含めて、最後にまとめて掲載いたしました。

「貿易統計」は、1類の「動物」から97類の「美術品」まで品目毎に細かく分類されていますが、個々の品目は6桁の国際標準コード（H.S. Code）に日本独自の3桁を加えた9桁のコードで表されています。洋書や雑誌は49類の「印刷した書籍、新聞、絵画その他の印刷物並びに手書き文書、タイプ文書、設計図及び図案」という項目に含まれており、49類の中は更に細分化されています。

個々の統計内容の説明の前に、2017年「貿易統計」全体の概要について簡単に確認してきたいと思います。（この内容は財務省の報道発表資料にもとづいています）2017年の輸出総額は、78兆2897億円、対前年比+11.8%で2年ぶりの増加、輸入総額は75兆2986億円、対前年比+14.0%で3年ぶりの増加となりました。差引金額は2兆9910億円で2年連続の黒字となりましたが、前年に対しては25.1%の減少となりました。具体的には、半導体製造装置や自動車等の輸出が11.8%の増加、原油や石炭等の輸入が14.0%の増加という状況がありましたが、差引では、上記の通り約3兆円の黒字となりました。2017年は基軸通貨のドルが対前年比で約3%の円安となり、その影響もあり黒字化したものと思われます。国・地域別では、米国向けは輸出入とも2年ぶりに増加し、差引でも7兆356億円の黒字となり、黒字額も2年ぶりに増加しています。また、EU向けでは、輸出額は2年ぶりに増加しましたが、輸入額が過去最大で、差引では6年連続となる968億円の赤字となりました。一方、中国向けは輸出額が+20.5%と過去最大となったものの、輸入額も2年ぶりに増加し、差引では3兆5532億円の赤字となっていますが、赤字額は2年連続で減少しています。しかし、この中国向けを含むアジア全体では、輸出額が過去最大の42兆9252億円、輸入額も3年ぶりの増加で36兆9921億円となり、差引では3年連続の5

兆9332億円の黒字となっています。

次に具体的な統計内容の説明に入っていきたいと思います。

（1）輸入額

1. 書籍・雑誌の輸入額

1) 2017年の輸入額（表1）

書籍と雑誌の金額ベースでの構成比はおおよそ86%と14%ではほぼ昨年と同じ割合です。総額は2016年に比べて約3%増加しています。個々の金額のうち、雑誌はほぼ昨年と同額であり、3%の増加は書籍の伸びによるもので、構成比が大きいため金額でも約7億円の増加となっています。一方で、2017年と2016年の為替相場の動きを見えますと、年間平均レートがドルでは約3%、ユーロでも約5%の円安となっていますので、これが輸入額（円ベース）増加の要因の一つになっているのではないかと思います。仮に、原価が変わらなかったとして、円安の場合は輸入金額が増えるはずですので、統計に現れている金額（円ベース）だけでは分からない原価ベースでの輸入額の変動があったのではないかと推測できます。この点については後段の「為替の影響について」の項目で改めて触れたいと思います。

（表1）2017年の書籍・雑誌関連品目の輸入額

（単位：百万円）

分 類	品 目	2016 輸入額	2017 輸入額	前年比	構成比
印刷した書籍、小冊子、リーフレット その他これらに類する印刷物および絵本	単一シートのもの	769	778	101%	3.0%
	辞典および事典	58	118	203%	0.5%
	その他のもの（書籍）	17,947	18,851	105%	72.2%
	幼児用の絵本及び習画本	3,113	2,835	91%	10.9%
	小 計	21,887	22,582	103%	86.5%
新聞、雑誌その他の定期刊行物	1週に4回以上発行するもの	2	1	50%	0.0%
	その他のもの	3,519	3,515	100%	13.5%
	小 計	3,521	3,516	100%	13.5%
合 計		25,408	26,098	103%	100.0%

2) 最近 10 年間の輸入額の推移 (表 2)

2008 年から 2017 年の 10 年間の推移を見てみると、長期的な輸入額の落ち込みが顕著に表れているのが分かります。2008 年を 100 とした場合、2017 年の輸入額全体では 59 と大幅に減少しています。個々に見ると、2008 年に対して書籍が 72 となっているのに対して、雑誌は 26 と更に大きく

減少しています。いわゆる本離れの影響が洋書の世界でも進んでいるということかと思いますが、雑誌に関してはやはり「電子化」がますます大きく影響しているのではないかと思います。また、2017 年の輸入額と同じような為替の影響に加えて、10 年というスパンでは原価ベース（数量）でも大きく減少しているものと推測されます。

(表2) 最近10年間の書籍・雑誌関連品目の輸入額の推移

(単位:百万円)

品目	印刷した書籍、小冊子、リーフレットその他これらに類する印刷物および絵本											新聞・雑誌			合 計		
	単一シート		辞典・事典		その他(書籍)		絵本		小計								
	輸入額	前年比	輸入額	前年比	輸入額	前年比	輸入額	前年比	輸入額	前年比	対2008	輸入額	前年比	対2008	輸入額	前年比	対2008
2008	242	79%	179	140%	26,927	91%	3,881	77%	31,229	89%	100	13,300	84%	100	44,529	87%	100
2009	221	91%	74	41%	22,920	85%	2,798	72%	26,013	83%	83	10,962	82%	82	36,975	83%	83
2010	257	116%	107	145%	22,646	99%	2,636	94%	25,646	99%	82	9,137	83%	69	34,783	94%	78
2011	469	182%	55	51%	21,643	96%	2,915	111%	25,082	98%	80	7,165	78%	54	32,247	93%	72
2012	664	142%	64	116%	19,997	92%	3,072	105%	23,797	95%	76	5,983	84%	45	29,780	92%	67
2013	680	102%	78	122%	21,845	109%	3,111	101%	25,714	108%	82	6,449	108%	48	32,163	108%	72
2014	850	125%	73	94%	22,277	102%	3,814	123%	27,014	105%	87	5,636	87%	42	32,650	102%	73
2015	771	91%	89	122%	21,860	98%	3,478	91%	26,198	97%	84	3,968	70%	30	30,166	92%	68
2016	769	100%	58	65%	17,947	82%	3,113	90%	21,887	84%	70	3,521	89%	26	25,408	84%	57
2017	778	101%	118	203%	18,851	105%	2,835	91%	22,582	103%	72	3,516	100%	26	26,098	103%	59

3) 主要国・地域別の 2017 年と 2016 年の輸入額

次に、国別の輸入額について見ていきます。上位 20 カ国の順位の変動はほとんどありませんが、昨年 21 位のアラブ首長国連邦が 19 位に、20 位のポーランドが 22 位と若干の動きはありました。(表 3-a)

このうち、上位 10 ケ国までで、書籍は輸入総額の 94%、雑誌は 93%を、更に上位 20 ケ国まででは、書籍は輸入総額の 99%、雑誌はほぼ 100%を占めており、輸入先が上位の国々に固定化している状況です。また、上位 20 ケ国の 2017 年の輸入額は 2016 年に比べて、書籍が 3% 増、雑誌はほぼ横ばいで、総額でも 3% 増となっています。

地域別の輸入額に関しては、米国と英国に加えて EU (英国を除く 27 ケ国)、東アジア (中国、香港、台湾、韓国)、東南アジア (ASEAN10 ケ国 + インド) を中心に輸入金額を集計しています。(表 3-b) 全体的に前年並の状況の中、東南アジアの

39% 増、スイスやカナダを含むその他国々の 51% 増が目立っています。

尚、この集計は主に輸入額の国別の順位を相対的に見るためのものですので、為替の影響に関しては考慮する必要はないと思います。

(表3-a) 2017年の書籍・雑誌輸入額の上位20ヶ国

(単位:百万円)

順位	品目 国名	2016 順位	書籍・辞典・絵本				新聞・雑誌・ その他定期刊行物				合 計			
			2016	2017	前年 比	構成 比	2016	2017	前年 比	構成 比	2016	2017	前年 比	構成 比
1	米国	1	6,154	6,119	99%	27.1%	1,767	1,802	102%	51.3%	7,921	7,921	100%	30.4%
2	中国	2	5,988	5,782	97%	25.6%	57	75	132%	2.1%	6,045	5,857	97%	22.4%
3	英国	3	4,037	4,096	101%	18.1%	1,044	859	82%	24.4%	5,081	4,955	98%	19.0%
4	ドイツ	4	1,231	1,289	105%	5.7%	32	18	56%	0.5%	1,263	1,307	103%	5.0%
5	香港	5	1,041	1,154	111%	5.1%	88	88	100%	2.5%	1,129	1,242	110%	4.8%
6	フランス	6	696	780	112%	3.5%	85	90	106%	2.6%	781	870	111%	3.3%
7	韓国	7	632	663	105%	2.9%	71	38	54%	1.1%	703	701	100%	2.7%
8	マレーシア	11	261	654	251%	2.9%	1	0	0%	0.0%	262	654	250%	2.5%
9	シンガポール	8	265	309	117%	1.4%	229	203	89%	5.8%	494	512	104%	2.0%
10	イタリア	9	193	289	150%	1.3%	96	92	96%	2.6%	289	381	132%	1.5%
1位～10位			20,498	21,135	103%	93.6%	3,470	3,265	94%	92.9%	23,968	24,400	102%	93.5%
11	台湾	10	258	221	86%	1.0%	25	225	900%	6.4%	283	446	158%	1.7%
12	スイス	16	93	195	210%	0.9%	2	2	100%	0.1%	95	197	207%	0.8%
13	ベトナム	12	183	167	91%	0.7%	1	1	***	0.0%	184	168	91%	0.6%
14	タイ	14	126	167	133%	0.7%	0	0	***	0.0%	126	167	133%	0.6%
15	アイルランド	15	96	115	120%	0.5%	0	0	***	0.0%	96	115	120%	0.4%
16	ブラジル	17	81	94	116%	0.4%	6	3	50%	0.1%	87	97	111%	0.4%
17	カナダ	19	55	83	151%	0.4%	2	2	100%	0.1%	57	85	149%	0.3%
18	オランダ	18	62	67	108%	0.3%	4	7	175%	0.2%	66	74	112%	0.3%
19	アラブ首長国連邦	21	38	48	126%	0.2%	1	1	100%	0.0%	39	49	126%	0.2%
20	ベルギー	13	145	35	24%	0.2%	0	0	***	0.0%	145	35	24%	0.1%
11位～20位			1,137	1,192	105%	5.3%	41	241	588%	6.9%	1,178	1,433	122%	5.5%
1位～20位 小計			21,635	22,327	103%	96.9%	3,511	3,506	100%	99.7%	25,146	25,833	103%	99.0%
21位以下 小計			252	255	101%	1.1%	10	10	100%	0.3%	262	265	101%	1.0%
合 計			21,887	22,582	103%	100.0%	3,521	3,516	100%	100.0%	25,408	26,098	103%	100.0%

(表3-b) 2017年の米国・英国と地域別の書籍・雑誌の輸入額

(単位:百万円)

品目	米国	英国	EU (英国除く)	東アジア	東南アジア	その他の 国々	合計
書籍類	6,119	4,096	2,719	7,820	1,343	485	22,582
雑誌類	1,802	859	212	425	207	11	3,516
合計	7,921	4,955	2,931	8,245	1,550	496	26,098
2017年構成比	30.4%	19.0%	11.2%	31.6%	5.9%	1.9%	100.0%
前年比	100%	98%	105%	101%	139%	151%	103%
2016年実績 (合計)	7,921	5,081	2,803	8,162	1,113	328	25,408
2016年構成比	31.2%	20.0%	11.0%	32.1%	4.4%	1.3%	100.0%

2. 書籍・雑誌以外の品目の輸入額

表4は、49類に含まれる品目のうち、書籍や雑誌以外の品目についての集計です。印刷物と言っても、設計図やデカルコマニアといった、洋書業界とはあまり縁のない品物も含まれています。10年前（2008年）と比べて総額で120と増加していますし、金額的にも書籍・雑誌に比べて倍以上という大きなものですが、49類に定められた品目の中に分類できない雑多なもの、「その他の印刷物」の中の「その他のもの」（残念ながら具体的な内容は不明です）の金額が多いような状況です。詳細は表をご参照ください。

(表4) 2017年の書籍・雑誌以外の印刷物の品目別輸入額

(単位:百万円)

品目	内訳	2016年 輸入額	2017年 輸入額	前年比	2008年 輸入額	対 2008年
楽 譜		483	445	92%	642	69
地図、海図、地球儀		766	1,229	160%	1,225	100
設計図及び図案		13	21	162%	52	40
郵便切手・収入印紙など		124	3,942	3179%	15,839	25
デカルコマニア(※)		1,200	1,234	103%	939	131
葉書、印刷したカードなど		2,031	2,045	101%	1,792	114
カレンダー	紙製または板紙製	2,584	2,562	99%	2,714	94
	その他のもの	86	144	167%	94	153
	小 計	2,670	2,706	101%	2,808	96
その他の 印刷物	広告、商業用カタログ	8,085	8,572	106%	10,236	84
	写真	2,291	2,841	124%	1,988	143
	絵画、デザイン	1,479	1,411	95%	1,472	96
	その他のもの	41,963	39,891	95%	16,712	239
	小 計	53,818	52,715	98%	30,408	173
合 計		61,105	64,337	105%	53,705	120

※ デカルコマニア: 転写印刷の技法そのものやこの転写に使う印刷された特殊な紙(原版)のこと。

(2) 輸出額

2017年の書籍・雑誌の輸出額（表5-a）は2016年と比べてほぼ横ばいの2%増となっています。ただし、輸入の部分でも説明しました通り、輸出決済に使用される通貨比率の直近の集計で51%を占めている米ドルが2017年は2016年に対して約3%の円安となっていますので、原価ベース（数量）の変動に加えて為替も影響しているのではないかと推測します。また、最近10年間の輸出額の推移を見てみますと、ほぼ横ばいの状況だった

ものが、ここ数年では少しずつ減少している状況があります。特に雑誌の落ち込みが大きく、輸入と同じく電子化の影響があるのかも知れません。(表5-b)

合わせて、最近10年間の書籍・雑誌の輸入額と輸出額の比率の推移を見てみますと、概ね輸入65に対して輸出35という状況が続いています。(表6)

(表5-a) 2017年の書籍・雑誌関連品目の輸出額

(単位:百万円)

分 類	品 目	2017 輸出額	2017 輸出額	前年比	構成比
印刷した書籍、 小冊子、リーフレットそ の他これらに 類する印刷物 および絵本	単一シートのもの	1,620	2,333	144%	16.6%
	辞典および事典	13	79	608%	0.6%
	その他のもの(書籍)	9,587	9,054	94%	64.3%
	幼児用の絵本及び習画本	43	54	126%	0.4%
	小 計	11,263	11,520	102%	81.8%
新聞、雑誌 その他の 定期刊行物	1週に4回以上発行するもの	1	0	0%	0.0%
	その他のもの	2,543	2,559	101%	18.2%
	小 計	2,544	2,559	101%	18.2%
合 計		13,807	14,079	102%	100.0%

(表5-b) 最近10年間の書籍・雑誌関連品目の輸出額の推移

(単位:百万円)

品目 年度	書籍・辞典・絵本			新聞・雑誌・ その他定期刊行物			合 計		
	輸出額	前年比	対 2008	輸出額	前年比	対 2008	輸出額	前年比	対 2008
2008	10,816	91%	100	4,717	98%	100	15,533	93%	100
2009	11,358	105%	105	4,593	97%	97	15,951	103%	103
2010	14,425	127%	133	4,974	108%	105	19,399	122%	125
2011	10,608	74%	98	4,305	87%	91	14,913	77%	96
2012	9,933	94%	92	3,609	84%	77	13,542	91%	87
2013	12,203	123%	113	3,306	92%	70	15,509	115%	100
2014	12,800	105%	118	2,892	87%	61	15,692	101%	101
2015	12,300	96%	114	2,638	91%	56	14,938	95%	96
2016	11,263	92%	104	2,544	96%	54	13,807	92%	89
2017	11,520	102%	107	2,559	101%	54	14,079	102%	91

(表6) 最近10年間の書籍・雑誌の輸出入額比率の推移

(単位:百万円)

年度 輸出入	輸 入		輸 出	
	金 額	比 率	金 額	比 率
2007	50,904	75%	16,641	25%
2008	44,529	74%	15,533	26%
2009	36,975	70%	15,951	30%
2010	34,783	64%	19,399	36%
2011	32,247	68%	14,913	32%
2012	29,780	69%	13,542	31%
2013	32,163	67%	15,509	33%
2014	32,650	68%	15,692	32%
2015	30,166	67%	14,938	33%
2016	25,408	65%	13,807	35%
2017	26,098	65%	14,079	35%

(3) 電子書籍・電子ジャーナルの状況

文部科学省が発表している「学術情報基盤実態調査」の数値を参考までにご覧いただきたいと思います。

この調査は、全国の国立大学86校、公立大学89校、私立大学608校、合計783の大学(平成29年5月1日現在)を対象に図書館の様々な実態を調べるもので、その中に「図書館資料費」に関するデータも含まれています。最新の平成29年度調査は、平成28年度決算額(平成28年4月～29年3月分)についてのもので、平成30年3月23日に文部科学省から発表されています。

この平成29年度調査によりますと、国内を含む「図書館資料費」総額は719億円で前年度より27億円減少しています。内訳は、冊子(書籍・雑誌)は対前11.1%(38億円)減の302億円、電子(電子書籍・電子ジャーナル)は対前3.2%(10億円)増の315億円、データベースを含むその他がほぼ前年並みの102億円となっています。

更に細かく見てみますと、海外の電子書籍は9%増の約7億円ですが、タイトル数では前年より約27万冊減って489万冊となっています。一方で、海外の電子ジャーナルは290億円で前年度より約6億円増えています。その背景には、為替の変動(平成28年度時点では円高)や価格の上昇に加えて、平成27年10月から適用された海外電子ジャーナルに対する消費税課税も影響しているものと思われます。尚、タイトル数は前年より16万タイトル増加し388

万タイトルとなっています。

表7はこの調査結果から平成28年度までの、洋書と外国雑誌、電子ジャーナル、電子書籍(e-Book)等の図書館資料費の集計です。(表にはタイトル数は記載していません)

「図書館資料費」総額ではここ数年ほぼ横ばいの状

況ですが、電子媒体が総額の7割近くを締めており、もちろん為替や値上がりの影響もあると思われますが、紙媒体の購入金額が減少しているのは明白であり、洋書や洋雑誌の輸入額が年々減少している状況を裏付けるものではないでしょうか。

(表7) 国公立大学における図書館資料費に占める海外出版物の購入金額の推移

(単位百万円)

年度 媒体		平成23年		平成24年			平成25年			平成26年			平成27年			平成28年			
		金額	対前	金額	対前	構成比	金額	対前	構成比	金額	対前	構成比	金額	対前	構成比	金額	対前	構成比	対23年度
冊子	洋書	7,560	11%	7,409	98%	11%	7,231	98%	10%	6,815	94%	9%	6,935	102%	9%	5,578	80%	7%	74
	外国雑誌	11,473	16%	10,060	88%	14%	9,928	99%	14%	10,445	105%	14%	10,279	98%	14%	8,988	87%	12%	78
	合計	19,033	27%	17,469	92%	25%	17,159	98%	24%	17,260	101%	24%	17,214	100%	23%	14,566	85%	20%	77
電子	電子ジャーナル	20,821	30%	21,832	105%	31%	23,609	108%	33%	26,396	112%	36%	28,389	108%	38%	29,007	102%	39%	139
	電子書籍	470	1%	640	136%	1%	615	96%	1%	692	113%	1%	638	92%	1%	697	109%	1%	148
	DB	3,421	5%	3,559	104%	5%	4,164	117%	6%	4,300	103%	6%	4,706	109%	6%	4,689	100%	6%	137
	合計	24,712	35%	26,031	105%	37%	28,388	109%	40%	31,388	111%	43%	33,733	107%	45%	34,393	102%	46%	139
合計		43,745	62%	43,500	99%	63%	45,547	105%	65%	48,648	107%	67%	50,947	105%	68%	48,959	96%	66%	112
その他(参考)		3,255	5%	3,167	97%	5%	2,837	90%	4%	2,684	95%	4%	2,554	95%	3%	2,498	98%	3%	77
図書館資料費総額(国内含む)		70,518	100%	69,547	99%	100%	70,554	101%	100%	72,966	103%	100%	74,601	102%	100%	71,896	96%	96%	102

※「構成比」は図書館資料費総額に対する割合

(表8) 主要通貨の為替レートの変動

年度 通貨		年平均レート									
		2013	2014		2015		2016		2017		
		TTS	TTS	前年比	TTS	前年比	TTS	前年比	TTS	前年比	対2013
米ドル(USD)		98.65	106.85	108%	122.05	114%	109.84	90%	113.19	103%	115
ユーロ(EUR)		131.18	141.92	108%	135.81	96%	121.83	90%	128.17	105%	98
英ポンド(GBP)		156.70	178.21	114%	189.10	106%	151.72	80%	148.51	98%	95
スイスフラン(CHF)		106.25	116.52	110%	126.85	109%	111.27	88%	114.84	103%	108
中国人民元(CNY)		16.20	17.49	108%	19.52	112%	16.67	85%	16.93	102%	105
タイ・バーツ(THB)		3.26	3.34	102%	3.62	108%	3.17	88%	3.39	107%	104

(表9) 書籍・雑誌の通貨別輸入額と計算原価の推移および、「貿易取引通貨別比率」にもとづく計算原価の対前値加重平均

(単位 輸入額: 100万円 原価: 1,000ユニット)

年度	2012		2013				2014				2015				2016				2017			
区分	輸入額 (円)	計算 原価	輸入額 (円)	対前	計算 原価	対前	輸入額 (円)	対前	計算 原価	対前	輸入額 (円)	対前	計算 原価	対前	輸入額 (円)	対前	計算 原価	対前	輸入額 (円)	対前	計算 原価	対前
合計	29,780	***	32,163	1.08	***	***	32,650	1.02	***	***	30,166	0.92	***	***	25,408	0.84	***	***	26,098	1.03	***	***
米国ドル	21,769	269,354	23,897	1.10	242,241	0.90	24,079	1.01	225,357	0.93	21,252	0.88	174,125	0.77	16,973	0.80	154,521	0.89	17,995	1.06	158,977	1.03
円	6,686	6,686	6,626	0.99	6,626	0.99	6,742	1.02	6,742	1.02	6,999	1.04	6,999	1.04	6,720	0.96	6,720	0.96	6,355	0.95	6,355	0.95
ユーロ	879	8,437	1,094	1.24	8,336	0.99	1,159	1.06	8,167	0.98	1,116	0.96	8,218	1.01	1,016	0.91	8,342	1.02	1,044	1.03	8,145	0.98
英国ポンド	60	456	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00
スイスフラン	89	1,038	113	1.26	1,059	1.02	131	1.16	1,121	1.06	75	0.58	595	0.53	64	0.84	571	0.96	0	0.00	0	0.00
中国人民元	0	0	48	0.00	2,978	0.00	163	3.38	9,334	3.13	226	1.39	11,590	1.24	203	0.90	12,193	1.05	235	1.16	13,874	1.14
タイバーツ	0	0	32	0.00	9,866	0.00	0	0.00	0	0.00	60	0.00	16,666	0.00	51	0.00	16,030	0.00	117	0.00	34,643	0.00
その他	298	0	402	1.35	0	0.00	539	1.34	0	0.00	437	0.81	0	0.00	381	0.87	0	0.00	352	0.92	0	0.00
加重平均	***	***	***	***	***	0.92	***	***	***	0.97	***	***	***	0.85	***	***	***	0.91	***	***	***	1.00

(4) 為替の影響について

表8はここ5年間の主要6通貨のレートの変動を示したものです。対象通貨は、財務省が半年毎に発表している「貿易取引通貨別比率」においてはほぼ99%を占める7通貨から円を除いた6通貨です。貿易取引で使用される通貨の約95%を占める米ドルと円以外の通貨は、ここ5年ほどの間に英国ポンドやスイスフランの比率が大きく下降する一方で、人民元やタイバーツが一定の比率で加わるようになっていきますのでこの表の対象通貨もこの6通貨としています。

表からは、2015年までの円安状況から一転して、2016年には急激な円高、2017年には再び円安となっていることが確認できます。このような為替の動きには様々な要因が考えられると思いますが、米国のトランプ政権の不安定な動きや中国の情勢が世界経済に与える影響、アベノミクスや日銀の異次元緩和の効果が薄れてきていることなども要因ではないでしょうか。

※貿易取引通貨別比率: 貿易取引全体の金額ベースの比率で、貿易統計に計上されたデータのうち貿易取引通貨が判明しているデータにもとづいて作成されています。

さて、「貿易統計」は、税関長が公示する外国為替レート（輸入申告の日の属する週の前々週の、実勢外国為替相場の当該週間の平均値）によって外貨から換算した金額にもとづいて集計されていますので、表面的には為替の影響が見えにくくなっています。つまり、統計に現れる金額の変化は、値上がりも含めた原価（外貨）の増減による部分と為替レートの変動による部分が合算された

ものであるため単純な動きとしては捉えられないという状況があります。

こうした為替の動きが貿易統計にどのような形で反映しているのかを確認するため、「貿易取引通貨別比率」をもとに、年度毎の通貨別の輸入額(円)を算出し、更にその年度の平均為替レートから輸入原価（計算原価）を算出してみました。表9は、この輸入額(円)と輸入原価（計算原価）、更に、通貨毎の対前年比に「貿易取引通貨別比率」を加味した全通貨の対前年比の加重平均値を加えたものです。あくまでも計算上の数値であり、参考値として見ていただければと思いますが、貿易統計の輸入額と原価の変動の違いが確認できるかと思えます。

例えば2017年は2016年に比べて輸入額(円)は3%の増加となっていますが、原価（加重平均）では対前1.0とほぼ前年並みの輸入金額となっていることが確認できます。また、2015年では輸入額が0.92(8%減)となっているのに対して、原価は0.85(15%減)と更に大きく減少しています。

このように、「貿易統計」における、輸入額(円)の増減は為替の影響を受け、輸入額が減ったとしても、実態として、原価ベース（輸入数量）では増えている（もしくは減り方が少ない）場合があると推測できます。（逆に輸入額が増えていても原価ベースでは減っているケースも考えられます）前の章で、「輸入金額の増減は為替の変動の影響を受けるはずですので、統計に現れている金額(円ベース)だけでは分かり難い原価ベースでの輸入額の変動があったのではないかと推測し

ましたが、この表の数値が一つの根拠になるのではないかと思います。

(5) 統計や経済指標について (参考として)

1. 国際収支統計

最初に述べました通り、このレポートは、財務省が発表している「貿易統計」(「普通貿易統計」)のデータを元に作成しています。この「貿易統計」に対して、同じく財務省が発表している「国際収支統計」の一項目である、「貿易収支」は「貿易統計」を基礎資料として作成されていますが、両者にはいくつかの点で相違があります。「国際収支統計」は、大きく「経常収支」と「資本収支」、「外貨準備増減」に分かれており、「貿易収支」は「サービス収支」や「所得収支」と同じく「経常収支」の中の一項目です。

「貿易統計」と「貿易収支」は、集計に使う建値と数値の計上のタイミングに違いがあります。「貿易統計」は、輸出は FOB (本船渡し条件)、輸入は CIF (運賃・保険料込み条件) で集計されますが、「貿易収支」は物とサービスの取引を区別して計上されるため、輸出入とも FOB で集計され、輸出入の際の運賃や保険料、諸経費は「サービス収支」として計上されます。また、「貿易統計」が、輸出は「積載船舶等が出港した時点」、輸入は「輸入許可の時点」で計上されるのに対して、「貿易収支」は「所有権が移転した時点」で計上されます。因みに、前の章の為替に関連しますが、短期的な為替変動の要因として、金利の変動や経済指標の発表、中央銀行の市場への介入といった点が挙げられ、一方で、諸説あるようですが、長期的な要因の一つとしてこの国際収支があげられます。国際収支が黒字であればため込んだ外貨(主にドル)を円に替える(買う)ため円高になるという理屈です。また、内閣府が景気の動きに関して毎月公式見解を示す「月例経済報告」をとりまとめる際の経済指標の一つとしてこの「国際収支」や「貿易統計」が参考にされています。

2. GDP にともなう議論について

GDP (Gross National Product 国内総生産) は、国内でつくられたモノやサービスの付加価値の合計で「経済成長率」の指標として使われていますが、近年 GDP の算出方法にいろいろと疑問の声が出され、実際 2016 年には大きな見直しが行われた結果、

名目 GDP が 30 兆円増えた、といったこともありました。これが意図的に行われたのかどうかは分かりませんが、安倍政権は 2020 年までに名目 GDP 「600 億円」の達成を目指し、「人づくり革命」や「生産性革命」、「働き方改革」といった基本的な経済政策(「経済政策パッケージ」)を推し進めようとしています。一方で、このような経済成長一辺倒の流れに疑義を唱える動きも増えてきている状況もあり、「経済成長不要論」も様々なメディアで取り上げられるようになってきています。

1960 年代の高度成長期は遠い昔の話で、2000 年代以降の経済成長率はほぼゼロというのが現状です。今後、更に人口が減り続けると見られているような状況の中で、再度大きく経済が成長するとも思えません。しかし、1960 年代と比べて現在の社会状況は大きく変わり、便利でモノがあふれ、ある意味で成熟した社会であるとも言えます。ただ、一方では、様々な格差や差別、ギスギスした人間関係の広がる社会でもあり、本当に豊かで成熟した社会は GDP の拡大を追い求めるだけでは実現できないのではないかと思います。なかなか難しい議論であり、簡単に結論は出ませんが、社会の本質を捉えた問題であると思います。

以上、2017 年の洋書貿易統計について、簡単ではありますが、報告させていただきます。不明な点や誤り、ご意見等がありましたら事務局までご一報いただければ幸いです。

参照元 URL

- ・貿易統計: <http://www.customs.go.jp/toukei/info/index.htm>
- ・統計品目全体の詳細: <http://www.customs.go.jp/toukei/sankou/code/code.htm>
- ・貿易取引通貨別比率: <http://www.customs.go.jp/toukei/shinbun/trade-st/tuuka.htm>
- ・税関長公示レート: <http://www.customs.go.jp/tetsuzuki/kawase/index.htm>
- ・学術情報基盤実態調査結果: http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/30/03/1402588.htm
- ・国際収支統計: http://www.mof.go.jp/international_policy/reference/balance_of_payments/index.htm
- ・GDP (内閣府): <http://www.esri.cao.go.jp/jp/sna/menu.html>

海外ニュース

スミスとガン、そしてクラスナホルカイがブッカー国際賞のショートリストに再び選出

ブッカー国際賞は、ブッカー賞の国際部門ともいべき賞で、英語圏ではない国の作家の作品で英訳出版されているものが対象となる。2006年に創出され、当初は英語で読めるすべての小説が対象で（故に当初はアメリカ人作家も受賞していた）、なおかつ隔年だったが、2016年からは英訳された作品が対象となり、毎年選出されるようになった。原作者と翻訳者の共同受賞となる点が、他に類をみないユニークな賞だ。

選考委員は、対象となる選考作品の中から候補作（ロングリスト）をまず選び、次いで最終候補作（ショートリスト）を選んで、受賞作が最終的に決まる。

今年は、3月12日に13作の候補作（ロングリスト）が発表され、4月12日に6作の最終候補作（ショートリスト）が発表された。

ブッカー国際賞の過去の受賞者である韓国の作家 韓江（ハン・ガン） Han Kangと翻訳者のデボラ・スミス Deborah Smith (2016年受賞)、ハンガリーの作家 クラスナホルカイ・ラースロー László Krasznahorkai (2015年受賞) が再び今年のショートリストに選出された。

クラスナホルカイの *The World Goes On* と同じ出版社 Tuskar Rock Press から、スペインの作家アントーニオ・ムーニョス・モリーナ Antonio Muñoz Molina の *Like a Fading Shadow* も選ばれた。キング牧師の暗殺者ジェームズ・アール・レイについて、彼が法の手を逃れて一時潜伏していたリスボンでの物語だ。

イラクの作家 Ahmed Saadawi は、この候補作ですでに 2014 年 International Prize for Arabic Fiction を受賞している。候補作 *Frankenstein in Baghdad* は、バグダッドに住むくず屋の男が死体を継ぎ合せて新しい肉体を作り出す話。

ロンドンの出版社 Fitzcarraldo Editions から、*Flights* がノミネートされた。「21 世紀の旅と人間解剖学についての話」というこの小説は、ポーランドの作家 Olga Tokarczuk によって書かれ、Jennifer Croft によって英訳された。「すばらしい遊び心にあふれていて、機知に富み、アイロニカル」とは選考委員の評。

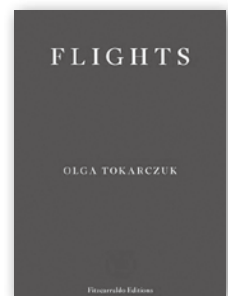
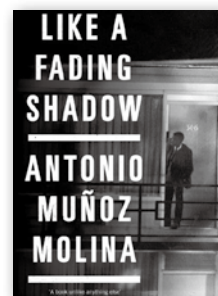
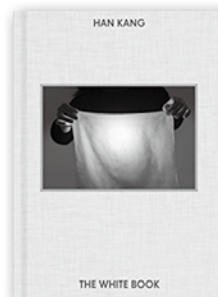
大手出版社から唯一の候補作となったのは、The Quercus のインプリント MacLehose Press から刊行された *Vernon*

Subutex 1 だ。フランスの作家 ヴィルジニ・デパント Virginie Despentes、翻訳は Frank Wynne。バステューヌで悪名高い楽器店を営んでいるが、商売にも人生にも行き詰まった男が主人公の物語。

受賞者は、来る 5 月 22 日にビクトリア・アンド・アルバート博物館で開かれる授賞式で発表され、賞金の 5 万ポンドは作家と翻訳者で平等に二等分される。

ちなみにブッカー賞のほうは、7 月にロングリストが発表され、9 月にショートリストが発表、そして最終的な受賞者は 10 月中旬、ノーベル賞の発表のすぐあとに発表される。

(The Bookseller Online, April 12, 2018 の記事を元に適宜抄訳)
情報提供: MHM 遠藤尚子



わたしの職場

リレー連載 ● 第2回

— ヴィアックス 図書館事業本部の仕事紹介 —

株式会社ヴィアックスは「ダイレクトマーケティング事業」「図書館事業」「関連事業」の3つを柱とし、事業を展開しております。とりわけ、図書館事業では、地域住民に親しまれ、人々が気軽に足を運ぶ図書館づくりを目指し、図書館運営を行っています。筆者は平成22年に株式会社ヴィアックスに入社し、受託運営（共同事業体）している新宿区立四谷図書館で図書館員として勤務し、平成29年4月より、ヴィアックス図書館事業本部運営支援部広報室に異動しました。

四谷図書館での勤務を振り返ると、図書館のカウンターでの資料の貸し借りの処理や、本の予約業務・整理・分類、レファレンス（問い合わせ対応）といった『通常業務』のほか、『企画広報』として、イベントの企画や図書館外へ発信する情報の交通整理のほか、広報紙や、館内で配布するチラシの制作をしていました。カウンターでは利用者の「タイトルはわからないけど、こんな本を読みたい」という質問が多くあります。以前、利用者から『ブラック・マンデー』という本のリクエストを受けましたが、ご指定の作家では見つからず、実は『ドクター・ブラッドマネー』ということがありました。タイトルの思い込みで本を探すことができないということとはよくあります。クレーム対応でも同じことが言えますが、事実をお伝えしながら、不快な思いをさせないように対応するのはとても難しいことですが、日頃からクッション言葉をストックするようにしています。また、よかれと思った対応で、利用者からお叱りを受けてしまったことがあります。電話口で明るく対応したことによって軽率だと捉えられたり、カウンターで丁寧な動きを心がけていたら、「動きが遅い」と指摘されてしまったりすることもありました。お一人おひとりに臨機応変に対応することを心掛けていました。

また、四谷図書館では受託当初より『地域に密着した図書館』をミッションに掲げ、地域特性をふまえた図書館サービスを展開しています。地域の方々には、図書館で本の貸し借りを行っていただくだけでなく、調べものなど様々な機会に立ち寄っていただきたいと考えています。『地域に貢献すること』も公共図書館の重要な役割だと考えているので、地域の方々の会議に



参加して、意見交換したり、地域で作られた小冊子を収集したりして、情報発信に協力することもあります。また地域資源の利活用という観点から、江戸四宿である『内藤新宿』をひもとく歴史講演会や図書館に隣接する新宿御苑での街歩きワークショップやバードウォッチング、江戸野菜のひとつである『内藤とうがらし』を使った調理ワークショップを開催しています。

公共図書館は、地域の人々の求めに応じて、商業出版物や出版流通に乗らない地域資料（郷土資料・行政資料）をさまざまな情報メディア（印刷資料・デジタル資料・インターネット情報資源）などで提供を行っていますが、図書館で多様な形の情報を扱い、実感したことは、「情報のもとにも、先にいるのも『人』である」ということです。そして、図書館内外においてパブリックリレーションズの構築が図書館サービスの活動の土台になり、発展の礎になると確信するにいたりました。そこで、現在は、受託している図書館で働く社員向けにパブリックリレーションズ構築の重要性や必要性を社内媒体や図書館PR講座の実施を通して発信しています。

今後も人と人との間の情報を想いと共に運ぶ者・機関として、図書館員・図書館の役割を考えながら、仕事を積み重ねていけたらと思います。

株式会社ヴィアックス

図書館事業本部 運営支援部広報室

遠藤ひとみ

我が社・わが街

第14回 新宿西東

フランス図書

近藤文智

私が東京に出て来た1976年、洋書店と言えば銀座のイエナを知っていただけでそこはすぐ「見物」に行きましたが、創業後10年になろうとしていたフランス図書(1967年3月創業)はまだ知らず、仏文の2年目に望月芳郎先生からブチ・ロベールと一緒にその存在を教えてくださいました。まもなくその大きな布装の仏辞典を買いに新宿駅西口に行ったのですが、一語一語についてその語源から歴史順に記述するスタイルの辞典に感銘し、この辞典はただ積んでおくだけにはなりません。新宿郵便局そばの小さなビルの4階のこの店にはその後も時々上がって行つては背伸びをして1冊買って帰ったりしていましたし、授業の帰りに同級生数人と連れ立って行ったこともあります。そんな具合で、学年が進むにつれてここで買った本は増えたものの、それらは店頭でチラチラ眺められたきり私の本棚に場所を移したのみと言うのが実態。

この新宿西口と時々接点のあった頃の思い出と言えば1981年10月のマイルス・デイヴィス来日公演です。京王プラザホテルの向こうはまだ空き地のままで、その淀橋浄水場跡に組まれた仮設ステージによりやく現れたマイルスが電気仕掛けを通して時折ぼそぼそと聴かせるトランペットの音は到頭盛り上がりなしのまま終わってしまい、西口へと戻る観客からは「金返せ」のつぶやきが漏れ聞こえる気がしました。

その観客達が西口地下通路(そこはもう広場とは呼ばれない)へ降りて拡散して行ったように、私も仏文とは別の方面へ向かって雲散霧消、したはずのところ、昭和が終わる前年になぜか新宿西口のビル4階に戻って来て今度はカウンターの内側に立つようになり、その後長い時間を奥の事務室で過ごしたのです。

その間に上述の空き地には都庁が建ち、浄水場跡地の記憶は一掃されました。同時に駅からそこまでを往復する人の太い波が出来て、以後その新規の人々を狙った新しい店がどんどん増殖しました。いつのまにか工学院大学の隣の小学校は廃校になり跡形もありません。一方ビルの4階はもともと知っている人しか訪れない場所だったので周りのその変化から取り残された珍しい場所になっていましたが、それでもとうとう残り続けられない状況になり、2013年に新宿御苑近くのビルに移って来ました。

その昔内藤新宿と呼ばれたこのあたりも今ではビルが立ち並んでいます、ビジネス向け以上に住居用マンションが多く、つまりここに暮らしている人が大勢いますし子どももいて、その

中心には幼稚園を併設した花園小学校があります。校名は、少し離れていますがこの界隈(新宿一丁目)も花園神社(新宿五丁目)の氏子であることに由来するのでしょうか。近くには文明堂の店があり、道を隔てた工房では特製のどら焼きを焼き上げている様子などを外から見ることができます。小学校のすぐ隣はシアターサンモール、舞台好きの方ならご存知ですね。

この一画とは新宿通りを挟んだ反対側にあるのが新宿御苑で、ここの桜は有名です。見頃になると大勢の人が詰めかけますが、その喧騒を遮る塀を境にすぐ隣(ダ・コテ)にあるのがル・ビストロ・ダ・コテ。外観通りに居心地の良いこの店で美味しいランチやディナーを頂くのが楽しみで、友人知人を誘っては春ばかりでなく季節ごとに訪ねています。

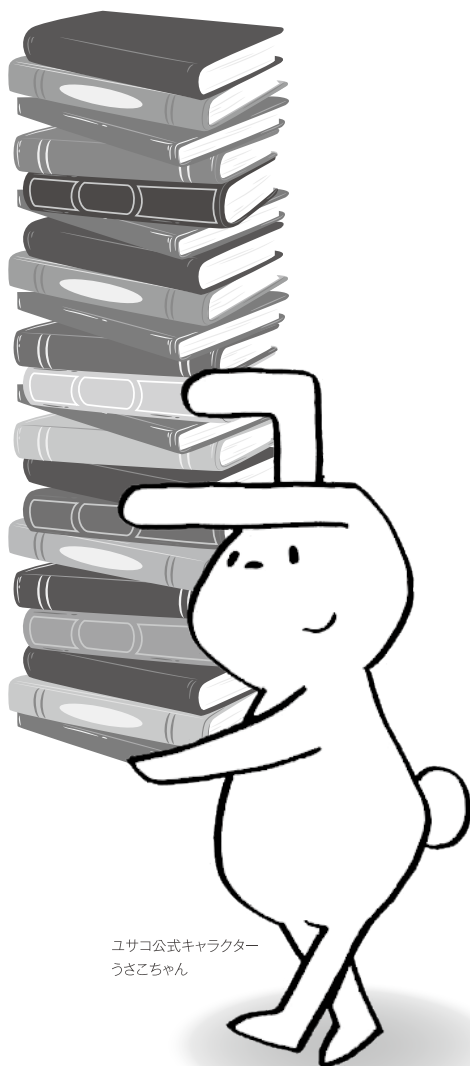
会社の移転に際して店舗営業をやめざるをえなかったのは私自身大変残念なことでしたが、この落ち着いた街に居を据え直し、もともと営業の大部分を占めていた大学および教員向け販売と、店舗営業に代わるものとして新たに始めたインターネット販売により書店営業を継続してこれたのは本当に幸いです。この5月で移転後めでたく満5年になります。



ル・ビストロ・ダ・コテ、
奥に新宿御苑の木々



内藤新宿の古刹、太宋寺の銅造地藏菩薩坐像



ユサコ公式キャラクター
うさこちゃん

ユサコは、これからも学術情報を通じて
研究者を支えていきます

———— ユサコ株式会社 ————